

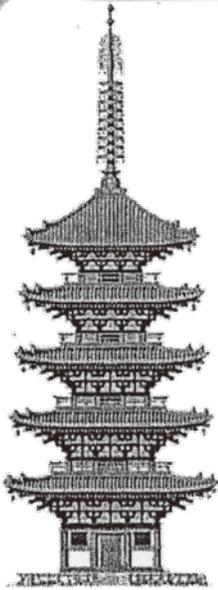
# 弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。春が待ち遠しい季節ですが、寒い日が続きます。くれぐれもご自愛ください。

弘法さんかわら版は二〇〇号になりました。ご愛顧ありがとうございます。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

さて、**覚王山日泰寺縁起**をお伝えしている今年のかわら版。世界的に**本物と認められている仏舍利(お釈迦さまのご真骨)**がなぜ日泰寺に祀られたのか。その歴史です。

## ★八大聖地

インド北部のお釈迦さま縁(ゆかり)の地は聖地となっています。生誕地は**ルンビニー**、覚りを開いた場所は**ブッダガヤー**、覚りの後に初めて説法した地が**サーナルト**、涅槃(ねはん)に入った(亡くなった)場所の**クシナガラ**が**四大聖地**。

さらに、修業で籠もった霊鷲山(りようじゆせん)のある**ラージャグリーハ**、お釈迦さまが模範的な都市として一目置いた**ヴァイシャリー**、修業場所として信者が寄進してくれた祇園精舎(寺院)の所在地**シュラヴァステイ**、昇天伝説のある**サン**



インド八大聖地(大塚耕平「仏教通史」より)

**カーシャ**を加えると**八大聖地**。このうち生誕地のルンビニーは、お釈迦さまの出身である**シャークヤ(釈迦)国**の都**カピラヴァストゥ**の近くです。

お釈迦さまは亡くなった後に荼毘に付され、**遺骨(仏舍利)**はお釈迦さまに帰依していた八つの国(部族)に分けられたと伝わっています。

当然、シャークヤ国にも分骨され、仏舍利を祀った場所がカピラヴァストゥと言われています。都ですから、当然です。

ところが、カピラヴァストゥの場所が考古学的には今なお論争になっていますが、仏舍利が発見された**ピフラーワ**こそがカピラヴァストゥではないかと考える説が有力です。それにしても、その仏舍利はどのような経緯で発見されたのでしょうか。

## ★ウィリアム・ペップ

その頃、インドは英国の植民地。ビクトリア女王がインド女王として君臨していました。

インドには多くの英国人が駐在していました。そのひとりが**ウィリアム・クラクストン・ペップ**。植民地の地方行政官でしたが、探検家でもあったと言われています。

当時は欧米諸国で考古学が盛んになっており、研究者や探検家によって古代文明のあった地域の探検や発掘が行われていました。映画インディ・ジョーンズのような世界ですね。

英国政府も植民地政策の一環として、一八六二年に考古調査局を設置して遺跡の発掘を奨励。ペップもその政府の方針に沿って、自分の広大な所有地(管理地)を調査していました。

**一八八八年(明治三十一年)**、そのペップがネパール国境に近い**ピフラーワ**という場所で**仏舍利**を発見するのです。

ピフラーワはお釈迦さまが生まれた**ルンビニー**という場所から西南方向に約三十キロメートル。

ペップが以前から気になっていた、小高い丘。不自然な形であったため、何かの遺跡であろうと考え、**一八九七年(明治三十年)春**、発掘を開始します。

丘を掘り下げていくと、煉瓦(れんが)造りの墓のような遺構が現れました。表土を取り除くと、全貌は**直径三十五メートル余の人造の塚**であることが判明。塚の中心に向かって、多数の煉瓦が漆喰(しっくい)で幾重にも積み重ねられていました。

**一八九八年(明治三十一年)一月**、遺構の頂上から三メートルほど掘り

下げたところで石造りの瓶を発見。瓶の中には珠玉、水晶、黄金の装飾品が納められていました。

遺構の中には円形の空間が造られており、その中は土と**アシヨカ**王時代の特色を示す煉瓦で固められていました。アシヨカ王はお釈迦さま没後二百年後にインドを統一。仏教を篤く敬った王です。

そこからさらに五メートル掘り下げると、大きな石板が出現。石板は棺(ひつぎ)の蓋でした。



ピフラーワの遺構(煉瓦が漆喰で積み重ねられている)

## ★歴史的発見

この棺の中から、いよいよ**仏舍利(お釈迦さまのご真骨)**が発見されます。そしてそれは、お釈迦さまが実在の人物であったことが認識される契機となる**歴史的発見**となります。詳しくは来月。乞ご期待。

